

「旧江戸御府内最古の店蔵」保存再生計画

「店蔵」を解体してわかったこと



山岡嘉彌

このほど戸建ての自宅を小規模の集合住宅に建て替えた(写真①)。2020年までは「旧江戸御府内最古」といわれる店蔵を玄関とした「店蔵+主屋」で暮らしていた。

「主屋」の建築は昭和7(1932)年、「店蔵」は江戸中期・宝暦年間(1751~1764年)にさかのぼる(写真②)。明暦の大火のあと現在の南麻布に仙台藩松平陸奥守(伊達政宗公)の下屋敷ができたことから、大名屋敷への出入り商人の町がつくられていったようだ。江戸中期のこの地の「沽券」(写真③)などの資料によると、均等の間口の長屋が道の両側に一列に軒を連ねて並んでいたことがわかる。

我が家は近江商人としてその一角に店を構え菜屋として商いを始め、徐々に炭・米・薪なども扱うようになった。その「店蔵」には菜箱でもあった箱階段、提灯箱、菜看板などが往時のおもかげを留めていた(写真④⑥)。明治以降商店街として盛えていたこの通りも、昭和に入り、戦後は徐々に「蔵」を持つ商店もなくなり、ついに我が家の「店蔵」が唯一の「蔵」となってしまった。

旧商人町の最後の遺構として「失いかけている町の歴史と文化」の証を新たな提案のもとでこの地に残そうと考え、「店蔵」を組み込み、それに調和する集合住宅に建て替えることにした。質実な近江商人の末裔として、江戸中期の質素な「店蔵」をいかに残し利活用していくか、「リビング・ヘリテージ(生きた文化遺産)」として次代へと引き継いでいきたい。悩んだ末の保存再生計画である。

店蔵をいったん解体し、すべての部材を滅菌殺虫処理し、傷んでいる部分を「修補」し再建する。その部位に将来のために「令和参年修補」の烙印を押した。柱、梁の多くには経年劣化、白蟻被害があり、火災により炭化した部分もあった。「金輪継ぎ」などの構法で根継ぎしたものも多い。箱階段をはずしてみると、太い竹と太い荒縄で組ま

れた「竹小舞」の土壁の土の多くは、下方へ崩れ落ちていた。

製材の機械のなかった時代の柱や梁、天井材などは、すべてチョウナ、オノ、カンナ、ヤリガンナといった大工道具で削りながらつくられている(写真⑤)。元・奈良文化財研究所の研究者や大学教授らの立会いによって、この「切削痕」が建設年代を分析し、特定する貴重な証拠となることも初めて知った。

店蔵の玄関には治安のための手斧仕上げの指物を渡した吊戸(潜戸付)があり、その指物には「安政七庚申正月廿五日、建具屋治助造之」という墨書がある。その袖には吊戸を連結固定するための小扉(引戸)がついている。解体時、店蔵外部両脇の封印されていた戸袋から戸車付きの「土壁防火扉」6枚が発見された(写真⑥⑦)。各扉とも堅框と上框は鉄板包に、下は銅板包となっている。いわゆる戸板部分は全面土壁仕様で、上塗は黄大津壁仕上げとしている。極めて貴重であるとの研究者の提言により、うち1枚は港区郷土歴史館に保管收藏された。2年に一度は大火があった江戸時代の防火戸で、店蔵の正面の格子戸全体を覆い、火災の延焼を防ぐ重要な役割を担ったようだ。

「店蔵」は8メートル四方の小さなものであるが、さまざまな文化史と技術史の語り部である。解体は建築家としての私にあらためて多くのことを学ばせてくれた。

今回の保存再生工事にあたっては、店蔵に調和させる外観全体は、いぶし瓦、薄鉛色の現代版漆喰、杉板本実加工化粧型枠によるコンクリート打ち放し、SUS製による銀色の金属製簾戸、溶融亜鉛メッキ仕上げの金属手摺等で、古来からの「銀古美」の趣の佇まいとした(写真①)。消滅しつつある歴史ある江戸の町並みの「最後の時代の証人」として、かけがえのない原風景を未来へとつないでいきたいとの想いである。



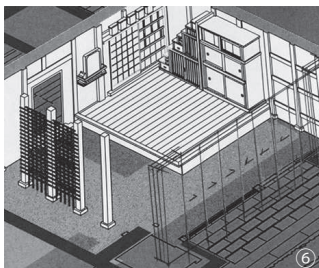
鶯啼居全景



上: 店蔵、下: 「沽券」



上: 店蔵内部、下: 大梁の「切削痕」の分析



店蔵内部の「箱階段」と「土壁防火扉」



発見された「土壁防火扉」